重修真書太閤記

五編 三

リ伊5
45

へ13
459
43

へ13特
門外書
號 459
冊 43

消 福井藩

重修真書太閤記五編巻之七

加州一揆羽柴秀吉察柴田胸中事 并佐久間盛政加州下向の事

江州安土山城築成就し信長岐阜より移徙あり猶天守を修築ありつゝ三月より其義を沙汰し始られ七月ゑ至て成就せり七重の楼閣金銀珠玉を鏤め結構言語ゑ絶せり西より北へ湖水漫くとして鏡の往来織ゞ如し竹生島の勝景雲間ゑなびく比良の岳比叡の大岳伊吹の山南ゑ煙立ちゝ民のかまど田畠渺くとして三上の山高し東北方ハ観音寺山の麓ゑ往

御印政

還るそうようそや乃鈴乃聲ふりさけ見りく我邦ふ類まれ
なる高殿やうに珍らしき大將と京鎌倉のためと引我もく
とそをのぐるを御禮とや諸大名毎日くふ引もきくび
珍器名物數と盡し天守のうちよくちくたるを誠ふ
希なる壯觀かなると聞人見人耳を驚うし目を肥をり
爰ふ石山本願寺の城中兵粮乏しをるより中國の毛利
家より兵粮七百餘艘を寄進の報處難波川口ゆ
織田家乃番船その數ゐのれハ容易く兵粮の船成
漕かくし然とも毛利の船奉行奇計をそなくし
七月十五日織田家の番兵を禰偽く兵粮を納る織田家の
番兵なそうくれしとを怒りく合戰ゆ及ひりれども

事不意ゆ起りしか故ふ番兵多く討死をり又八月
北國より早馬來りて言上に及ひけるを加州大聖寺の
城主戸次右近去年越前一揆退治ゆ後當城ふ向りて
加州を漸くふ切鎮よりの御許よりの術を廻りし
加州へ追く手遣ふ及ふ柴田修理進ハ加州軍のとふより
ゆ戸次難義ふ及そ一左右次第加勢をくきは同時ふ
仰出さるし勝家も承そりゆ吉御請やていひき然るを
此節戸次ゆ居城大聖寺ハ加州の郷民數万人一揆をそ
押寄來るふより右近隨分秘計をりく敵を欺き合戰
毎度勝利を得さくとも一揆を多勢なるふうゆ日くふ
勢らそくを城中ハ元より定まれる人數みて近所ふ

援けゐ〜因て柴田へ加勢のことゝや遣〜いとゝ勝家
更ゐ返答ゐ及ぶ〜さしとも左近少〜も退屈せゝ手勢
計り〜敷地山へ打て出一揆と合戰〜一揆を追散〜
首あまた〜討取て以即今度拵の首帳注進仕り以訖
拵れよりのち加州奥の郡〜一揆どもまた〜蜂起〜多勢
をゝく小松御幸塚ゐ屯〜大聖寺を襲ゑんとすゐ
風聞いよ〜〜左近馳付て〜されと合戰ゐ及ひ一揆原
大勢討取ていさりなか〜味方も限りあるとて一揆ハ
かぶ〜れぞ日〜にその數ゐて雲霞の如く押寄
来りい左近生涯の力をふるひ合戰仕りいかゝ一度も
押付を見をぶいか〜ある〜士卒もそでゐ疲れそい

早く御加勢を被下い度ゝと注進ゐ
一書ゐ一向宗門の郷民及ひ冨樫介ゐ浪人共一揆を
企て天正四年夏加賀國不忍橋へ出張せ戸次ゐれ
を聞敷地山ゐ打出合戰せ然るゐ一揆裏崩せて
冨樫六郎左衛門舟田又吉小里源太林新六郎以下
悉く敗軍ゐ及ゐ処一揆等再度奥郡の郷民を
催ゐ〜小松御幸塚ゐ要害をかゝ〜立籠る戸次も
敷地乃天神山ゐ砦を築くゐれを拒ぎ日〜夜〜
の合戰戸次毎度勝ゐ乗といへども一揆多勢なれハ
始終の勝利覺束なゝと思案〜援兵を安土へ
請と頻ゝとゐり

信長諸大將を呼集め評定ありけゝ加州一揆容易
ふ切鎮かゝるべきといつれも津波大聖寺を捨んとまゝ
惜かゝへく戸次左近を見殺ふもんと弓矢の道ふあた
早く大將を一人差下し蜂起の一揆を切鎮むべし
面〻誰う罷向ふべき所存ありとのたまはゞ
ひりけれハ羽柴筑前守進み出く注進此如くハ
戸次小勢を以く一揆の大勢を追却し度〻の合戰
勝利を得し条莫大の忠功といひ〻へ兼て柴田ふ
加勢の事仰付置ゝてふ勝家一度もこれを援そ
且隣國の味方難義の軍とのひ一揆蜂起といひ七州
總管領の職とゝてハれを援ひこれ鎮むべきよ

加勢をも出さゝ注進よりも及そ所ゝと抑何の趣意ぞや
戸次ハ柴田ふ加勢を請柴田より當所〻言上ふ及べき
筈なるに戸次より直ふ言上差越と云爲〻然なるに
左近うゝ処余儀なくゆへいそゝく大將を一人加州へさし
下れ然る爲く又柴田〻何故ふ戸次を援そさるやと御不審
仰遣そもそれゆへくゝいさゝ言上をしハ信長ふも柴田う
居城北の庄より大聖寺そして一日路乃間なり戸次
なりとひ加勢を乞ゝさるとも總管領の職といひ隣國
也一揆蜂起なり餘所ふ見るべきいそれなり勝家う
心中不審あるゝと宣へハ佐久間玄蕃盛政末座より
進み出加州下向の御使其ふ仰付られゝべくハ然ハ

叔父勝家と共ニ不日加州へ發向仕り一揆の奴原一人も
残さず誅戮仕るべくハ其上再度御加勢を請申ベシ
と言上しける傍より羽柴筑前守座をさくめ佐久間喜番
よくくもやされ給ふ御邊彼處ゑ下向あらバ征伐急度
埒明申ベシと執成けるゆゑ信長げにと思召然バ
盛政早く下向仕り速ニ一揆退治の功を奏ス可しと
許さるゝ処へ北の庄より早馬來りて越後の上杉
出張の風聞ありしゆゑ付て國中も上下騒動大形
ならず是ゆゑ加州の一揆蜂起のと承そりなゞら
出陣ゑ及ばず早く御加勢を下さるべしと注進ス羽柴
筑前守これを聞盛政下向仕りゆゑ加州一揆ハ神速ゑ

退治仕りいべし上杉出張のことハ風聞のゝゑ實事いまゞ
定かならぬ様ハ加勢を差下さるゝゑ及ばゞ其故いらと
申に去年八月謙信越中へ打て出加賀國迄亂入ス松任
の城を落して歸陣し今年また越中へ出馬ありしと
飛彈國へ打入江間常陸介を攻破り飛彈一國上杉ハ
手ゑ属しいとハ承りしかども越前國へ打入し
沙汰承ればいまだ謙信いまゝ猛くゆとも翼あり
ゑバ加賀能登の國を打越越前へ發向仕ゆべくや然ら
加賀の一揆とハ第一ゑ防ぎて越前の用心ともなる
べきゆゑ援兵を出さるゝと必故なるべくハ扨ても
戸次左近ハ數度の戰勞を賞をられ御褒詞の上盛政

代を當所へ還參の樣仰渡され然るべくゝゝと言上をかハ
信長も扨の心を悟り何ゝも筑前守の計らひ中処
尤ゝ思ひおもしめさるゝよくさそ心付たるとうち點頭ゝひ
ふたゝび佐久間玄蕃をゝめされそもく加州ゝ下向し一揆を
退治せべし彼國の奥郡まで其方ゝ任をらるゝ閉戸次ゝ
かゝりく忠勤をそげむべしと仰付られしわどゝ盛政
心中大ゝよろこびいそぎ加州へ下向し一揆を静め我乃
上ゝ奥の郡を切取く加州を領知せゞやとあるひ
うバ謹く御請ヶ直ゝ發足して加州へ赴く盛政勝家の
うらく參向し安土ゝその首尾をとりしがうかつ御意
の旨趣をあらまり能登越中まで打取とも御咎ある

ゝ迄ゝ隨分手柄次第と仰られしなれハ叔父
甥力を竭し北國を切平やべきぞうと相談し勝家
大ゝよろこびかゝる御詮あそまとふ大將の御下知なれ
と稱美なし早く軍を發しけり
一書ゝ佐久間玄蕃允盛政ゝ加州を賜ふ伐取次第
進退せへし叔父勝家越前より加勢せべゝと仰られ
うハ叔父甥共大ゝ悦ひ佐久間を援けく勝家加州ゝ
發向しまつ天神山を攻破るそれより不忍橋ゝ
押寄くこれを追落し勝家ハ越前へ引返せ盛政
御幸塚ゝ押寄德山五兵衛尉をして一揆のうちある
内山四郎左衛門尉林七助ゝ説く味方ゝあるかハ兩人

裏切して御幸塚を乗破るはかられより一揆松任尾山の
兩城より楯籠て先亡の恥辱を雪めんと計る由を聞て
翌る天正五年八月柴田を大將として齋藤新五郎惟住
五郎左衛門尉瀧川左近將監一益稻葉入道一鐵齋羽柴
筑前守秀吉佐々内藏助成政前田又左衛門尉利家金森
五郎八長近不破河内守原彦次郎氏家左京亮安藤
平左衛門尉を差向らるゝ此勢加州より亂入て犀川
手取川を押渡り阿武小松本折をそゝめ在々所々の
民屋を焼拂ひ此処々在陣して合戰止ることなく
けるか一揆終より戰ひ負諸方へ退散をつかハ切処々
押への兵をつゝき柴田以下の諸將ハ引返すと見る

勝家盛政加州へ發向し責りめく戰ひけれハ數月を
經さるゝ加州の一揆平均しけるゝより毛受勝助
吉親を使者をつかハ加州平均ゝ退治し畢る由を
言上をつかハ信長感悅ありて柴田佐久間
褒美を賜そりなを
一書ゝ毛受勝助吉親安土ゝ參上して加州平均の
事を注進をつかハ信長大ゝ悅ぎをられ毛受ゝ
桐引兩の御紋の羽織を賜そりしハ天正八年閏三
九日の後の事とゝ
信長密ゝ羽柴筑前守をめされ加州の事其方ゞ
ゝを通りゝ行りるそと仰らるゝからくゝを

打笑を給ひしかば筑前守も是ともに殿の御威光ふゆとやて退出をそもく戸次は九州征伐の御先鋒なるべきの代なるゆ北國大聖寺の城を預けるゆと いそれるゆ その上戸次そもぐく一揆と合戰して打勝たり 其れよ柴田加勢したらんまいるゆ戸次う功高くなりて柴田う北國の管領職の威かへつく薄くなるべしと勝家例乃嫉妬偏執ふうき性質より思慮しつれば態と加勢を出さるまじ 羽柴筑前守はしめをそやく推量しつるゆより盛政を推舉せし盛政柴田と親しけれ如何ある事みそるも勝家う見放りまるものと知るく謀をして果して玄蕃

下向しめるを修理進あれをたそくまゆ 信長秀吉相見る一笑を根木と知へ

柴田勝家二度加州出陣の事 并羽柴筑前守柴田と爭論の事

天正四年十一月四日信長上洛まゆ妙覺寺を以く旅宿となるゆ十三日正三位しく廿日内大臣ゆ任きらるゆ右近衛大將を元の如しと那り此月勢州北前國司北畠具教入道不知齋滅亡ゆ

權中納言具教入道不知齋權大納言晴具の嫡子

天正四年十二月廿五日於三重御呼信長乃こめゆ傷害生年四十九歳と北畠記ゆ見ゆ

けれゝ武田と一味し信長をそらられしゝ因くゝ
不知齋の嫡子左中將信意ハ信長の子息信雄の
養父とゝ以くゝ命を助け京都ゝ隱居をくゝ系
一樂菴入道是ありとかくそるゝどゝ其年もこゝぬく
天正も五年となり二月八日内大臣信長上洛ありこれハ
紀州雜賀の一揆を誅伐あるゝ〳〵そ嫡男城介信忠
二男北畠中將信雄三男神戸信孝堀久太郎秀政
佐久間右衛門尉信盛惟住五郎左衛門尉瀧川左近將監
一益羽柴筑前守秀吉惟住日向守池田勝三郎氏家
左京亮稻葉伊豫入道一鐵長岡兵部大輔蜂谷兵庫頭
筒井順慶法印荒木攝津守別所孫右衛門尉其外

在京の諸士殘らゝ發向そ
紀州名草郡雜賀彌勒寺山を要害とゝ本陣ハ
的場源四郎吹上の峯ゝ砦ハ松田源三大夫島本
右衛門大夫宮本平大夫藤井太郎右衛門尉中ゝ手
東禪寺の砦ハ鈴木孫市乾源内大夫和歌甲崎
の砦ハ雑賀掃部太郎同四郎八郎今井權七渡邊
藤左衛門玉川島名草邊ハ上口刑部穗手五郎左衛門
和歌玄意三井游松軒をゝ置くゝと云
三月ハ到そ雜賀平均〳〵お彩〳〵月乃廿四日安土へ
歸城ハくゝけるその八月北の庄乃柴田ゝ許より安土へ
援兵を被下ゆゝと言上ゝその故そ去年佐久間玄蕃允

盛政加州より下向し一揆を追拂ふといへとも奥郡の郷民
よりくく一揆より與力し雲霞の如く押来りしうハ
柴田佐久間加勢のくくめ出陣をそやとありへとも上杉
謙信越中飛驒へ亂入の企ある由風聞をきりなるふ
より柴田勇猛ありとらへども謙信と相當らんこと
そあるそ難し殊より旗下の前田又左衛門尉佐々内藏助を
始め歴々あるくく加州より赴きけるとハ勝家出馬の跡より
國中の一揆蜂起あさんをもくくかくて前ふ上杉の
勁敵猶と突あるくへ戰どいとくく中ハ加州の一揆
麻乃如くくぶれて山々より取籠る後より先亡北
門徒復讐のあるひをとおして鏃を礪いわとんと

御大事なるべく存ぜまれを思ふか故より御加勢成
御差下し給そりいそんとを庶幾仕ると誠より餘義
なるけふ中上しるハ信長元より上杉とハなをそろ恩と
思召れし所あり何とてもく援兵と催促あるべし
とて召とけるより惟住五郎左衛門尉長秀瀧川
左近將監一益羽柴筑前守秀吉稻葉入道一鐵氏家
左京亮齋藤新五郎安藤伊賀守森勝藏ゝ下安土へ
そと集る然るより信長柴田ら注進の趣を仰出され
面くく早く北國へ下向し柴田と力を合され一揆を
退治し上杉を討滅し給ふ由を仰含められ
けるより羽柴筑前守謹く言上しけるハ柴田ら注進の

趣きとゝゝ援あくいつとも當時攝州ゝ石山の敵あ
りていまゞ平治をたゞし四國ゝ三好の一黨時をまて
會稽の恥を雪めんとそゝ丹波丹後の國人ども
間あくゝゞと存じて螳螂立車ゝひゝゝ臂をそゝひべし
此時ゝ當りくゝ御旗本の勢をそゝ出ひそんとと
宜敷御計と存ぜゝ上杉はよくゝゝが故ゝこれ成
大事と御用心ひとゝ抜乃理明白ゝ聞えひゝども此上ゝ
武田四郎長篠の鬱憤を思ひ濃州へ亂入をそゝ
ひとゝも御手當あくてそかのひゝはゞそもく
北國の事ハ柴田總管領の仰をうけたまりひ
そゞめより了見もつるべきことゝゝ寄騎ゝ付られ

面くゝ何も一騎當千乃歴く那り前を撃んとくゝそ
かゝゝら後ゝ備ふることゝ存知の前乃ことなるべく
そとくハ越前一國を領くゝの〳〵上杉攻登ひたゞ
あくゝと降を請べき柴田と御覽ぜらるゝきやいそんや
盛政加州ゝ在く猛威をふるひそでゝ半國を平均
せくゝゝひそゞゝ加賀越前の勢をひく上杉を防ぐ
力那くゝゝ北國の總管領れその詮無ゝ似くゝい
ゝ上杉何ゝど大勢みて攻上りひとも五六萬の勢
みゝも過ゞさゞゝ人數を防ぎひと佐久間柴田
二人の手ゝ及ひひそゝ御下向ひとゝもたゝそく勝関
をそのげられんと難かるべく秀吉ゝ存ぜゝ処そ

いづれもさいはひ大将さちのうち一人二人イ三千
そうりの勢を御さし下し然るに名くいそんと憚ふ
処あるゝ中上けれハ信長大ふ氣色を損ゞ北國のと
能く大事と思召ふ如是く大勢を催され処
なるゆゑ筑前一人さ様よやうと更ふ心得られぞ四方ふ
大敵あれどもいづれも遠方乃敵ゆゑ打ておいまさ
寄来りしにもあらべ拙ものうへ畿内よハそれく味方
の將士あれば御氣遣ひよ及ぶまじく東國のことも
三州遠州すく喰留らるべしいづれも北國へ下向
しそく柴田ゆ力を合そべしと仰らるゝにより秀吉も
此上ハとく北國へ下向し北の庄よ到着し勝家ふ

面會しけるゆ勝家かねてより秀吉と不快なりけれバ
互の會釋乃そらなるぞあるゆ於く勝家ふいろ
筑前御邊ハ某と不快の中なるとハいそぐも面く知るとなり
されども我れハ私事今日のとハ殿の御大事なり心よ隔て
あるべく軍の評定承そらぞやと申し秀吉答て何ふも宿意ハ
宿意忠義ハ忠義各別の事ゝ軍の評定隔心なく可申事勿論
ありなば軍ハ北國そなる大事よなるぞ然るよ御邊ハその身ある
ことを知て主君あることを知ぞ眼前よ敵あるとを知て後よ敵の
起ることをしらべ拙くも加勢と請て殿の旗本の勢を透さこと
忠義といふべのとハ勝家大ふ怒り某北國よ下りて一揆を
打滅し大功を立さり何そ主君あることを知ざるべき上杉大軍

みて上洛せると近比我君の御大事なり因て加勢を請ゞ也と
勝家ゝ拙き故よあふぐ君を思ふと厚けれバ彼り然るふ
只今はれといふともなきに後ゝ仇の起るを知ぞあどいそ
と臆病ゝてかつハ人をあどそゝ辭といふ屋〜然ハ勝家
一身ゝて北陸道の敵をハ防ぐゝ何の難きとろひそん御邊
早く歸陣ありて御旗本を守らるべしとのゝハ秀吉いろゝも
左いそれてゝそ織田家の大臣あれよく防戰ゝるべし
御暇やそかゝとて秀吉一人引かへしゝり
流布本勝家と秀吉乃問答あまりに鄙俚ゝて道理
聞ゝ因て別本ゝ依て改正そ

重修眞書太閤記五編卷之七終

重修眞書太閤記五編卷之八

羽柴筑前守秀吉被止出仕事
并筑前守於居城游樂事

羽柴筑前守秀吉柴田加勢とゝて越前國ゝ下向ゝれ
共安土の無勢ゝるを以て不時乃變あんとを怖れ
柴田とはれを討論るといへども勝家偏執の見
深くして秀吉ゝ本意達ぎゝ稲葉瀧川以下乃
諸將はれを和平ゝ筑前守乃勢を引分て安土へ
歸らむ然るゝ信長秀吉の自由ゝ引歸をとを
怒て給ひ言語道斷の曲事彼り子細を聞ゝ

及ビ出仕を禁ズ籠居そべーと仰出され更ラ
御前へ参ル出されねバ筑前守畏奉る由御請ヤて
退出ル小谷ヨリ歸リ城門を閉狹間を塞いて知音
近親の往來を禁ぜ然ハこの日頃筑前守と睦び
馴ふ〳〵もの多く氣の毒ふあのひ指も功ありて忠義
深き筑前守を如是ふ御勘當あるふと信長短慮の
一失なる哉〳〵然ル〳〵とも讒者の舌頭利と干將
鏌邪を鈍〳〵と云ハ此上如何ある御咎かあらんぞ〳〵と
手ヨリ汗を握リ〳〵危ぶミ居ル羽柴が郎黨どもハ
殊更ヨリ恐怖ル〳〵て寢食を快くせるもなく只茫然
と〳〵互ヨリ顔を見合を肩息を継然るふ筑前守ハ

少も愁ル〳〵氣色を見をび朝ヨリハ早く起出く
馬を馳昏ふハ猿樂舞師を集めて酒宴ル忍び
ふ多くあれど又憚る体ヨリ〳〵時とてハ乱鳥
のこゑ〳〵も及べりかく〳〵日〳〵夜〳〵乃ヒ形ハ浅野
蜂須賀かども大ふ心を傷ますあなり万〳〵信長こゝ
ろを慮食れ御勘當籠居のうち慎罷あ〳〵酒宴
遊興ふ日を送ル〳〵と上を輕ド法を恐れぬ不敬の至と
て所帶を没収きら〳〵るひハ腹を切とや仰られん
いざやヤとゞめて寢を安くせぞやとて浅野蜂須賀
ろ共ふ筑前守の前へ出此頃御勘當のこと畏入くい
御事かゞ〳〵聊も御慎乃御容子かく日〳〵夜ふ酒宴

一時として猿樂あるどを召されふく舞つかまでの放埒の御振舞平常の御氣質より似も付ぬ恐れなから天魔乃所業とやべ神妙ふ閉籠て御坐ハ安土よりも思ひ返させるふと早くいべ如是さく少も憚る色なく御心任よあさをるそんふをく許ぬべき御勘當を許ざるべきことおのそれ〳〵と誠よ余義もなげよりけれバ秀吉莞爾と打笑ひ何条さることのあるべきや某奉公の始より一日片時を身を安くをることなくいさゝか身を起してよりこのゝ股ハ馬上よりをりよを鎧かふとハ脱よ那く千辛萬苦して美濃の國を取江州を切平け越前を破り五畿内を御領とを

伊勢を打取近これ皆殿乃御為ふていさゝかも我身の慾ふきゝこと那く然るよ今度そゝ〳〵北國乃軍ハことよりよりく御勘當を蒙りかやうよ籠居をることを是又殿の御恩ふして身の暇を賜ハりけれハ此数年の閑心を苦しめ鬱念を散ト おのふまに保養をそやとあのべバそづ第一ふ酒宴を催なへ酒を愁の玉をぐき胸よりのゆるる憂ゝをを拂ひつゝして樂まんなりハ増りれあらされどる獨盃を取もさをふ寂々〳〵酒を欲する上戸を集めおのふ淆よ醉ふひ天地ひゝとゝいふとく水火も更よあそ論〳〵かゝび雷神のひゝきより聟けりふを

鼻の息囂〻とゆ〻しく音高しされこそ醉郷の日月あれ猿ハ元より秀吉乃身ゆかなひしる藝あれハ其ものを咎むるよりも彼〻ての名あり彼の醉心地秀吉ハ四十二歳かゝ月ぐ酒宴のなかゝさと知らく過ふ年月のと正体も彼〻く立上り笑ひ舞つをどり狂ふそ乃さまとゆ徒あ〻ぶ浅野蜂須賀あきれそゝく智謀深く軍慮かゝふ彼良將あらゝかゝふ有様ハよ〻ゝも不思議のことかあと何も當惑しけるか浅野急度思案〻けるハ我妻と筑前守の内室とハ疎か〻ぬ間が〻へさ〻ばされる就く事をたのふべ〻とやゞく内室の方へ参る此頃の有様ひとゝ

天魔の所業とゆ〻ぶ彼ゝ御才覺ゝてあゞく慎よもゆふ様ゝ御異見あ〻ぶやと存ゆといつハ内室かゆ〻ゝより心付し事なゞく流石此頃の智者といゝふ〻ゝ夫彼又其慶ゝもさてあ〻ぶ女ゝ外をいそぬり彼と母御乃いまめ彼ひ〻めをとおりひ返〻てなりつゝる拔〻やさ〻ハ云く見べき彼りと浅野をハかへ〻内室ゝづか〻盃とり筑前守のおもろぼ立狂ふ側へより相馴染く十餘年かゞり彼藝ふさ堪能ゝ御座さんと思ひ寄ねハゝ〻めて見奉る此道を立ふ彼ゝ何とて拙きやゝん自も在所で習ひ覺一手ありとて諸共ゝ立上り扇を開き一指舞く

立ちこれハ勝手の方より女子共さるぬぐの用事を執く出来り次の一間よりかゝこまり舞のそつるを見居てあるゝ様ふ見へまゐれハ筑前守そゝく見かゝり内室ゝ向ひおもてゝ御事の異見ハ聞えこそされども思慮乃足ぬ処あり今ゝぞ〳〵何とも云ぶ見ゝく居たゝゆくといそれゝく内室をゝ様の意をさとり扨ゝ奥へ入るゝふ是ハ我身一人舞遊べハ我召仕ふ女子供の用事の闕るといふを以ゝく諷諫をゝ筑前守をゝゝゝ悟りおもゝゝと少ぐめられゝを内室ものちゝ政所殿とて世ゝ重くかゝづられたゝふそどの人なれハ夫の心を能知ゝく又いふともなく我住

かゝへ入ゝなり浅野ハやゝく内室のゝゝ伺ゝて何と仰られゝぞとよに待遠ゝげゝ伺ゝハ内室浅野ゝ宣ふ様筑前殿の心乃中大形推量ゝ川ゝどもたゝふそれとも定めがゝ竹中半兵衛尉重治ハ筑前殿と殊ゝ親ゝく其上ふ竹中か言ふことをば夫もゝく聞入るふりをなどて今ゝまで彼人ゝゝ謀らさりしぞといふゝ浅野げゝのと心付その侭竹中ゝ住方へ訪ゆきこの日頃筑前守の有様どゝろ出せば重治聞くさるなりなゝ侭左もあらん左もてハなるゝすぐいぞふく深く感ずる氣色なり浅野ハゝにも不審ありへハ近くよりみより何とく左も

宣ふ様我らを始筑前守の所業けしからぬと思ひ
内〻異見をしてゆくゆく如斯いふべく更ふ聞入ぞ依て
御邊の教導を問ぞやと存て参りいひたれと御邊も
左様ふ宣ふと浅智の身ふハ釋かぬことと詰るを竹中
打笑ひ本國寺軍乃武者風ふハ似ぬものかるたゞし
さのゝ〻もの様思そなるも罪ゆゑに譚て聞せ申
べく筑前殿ハ廿餘萬石ハ大名なれ小谷ハ名高き
城地あり人數も若干持ふふ勘當うけて籠居
をそなるよいとのれもあれのでゆるるらハ謀叛を企つる
なんどゝいそふんとものうるさゝに左様う酒宴遊興
してくゝをそれとさ乃重治ハあのひ故用意ふるき

筑州このなと心をふつのく感じゆるれと御邊等ハ左ハ
ありそざるとゝまやといそふんく浅野手を拍く實う
智嚢と人の沙汰をそふるあそせく竹中殿を面〻の
思ひの寄ぬ処へ心の付をるふりれうふ夫すて思ひ當り
とのゆ様ゆ猿樂舞の師どもハ何も安土の扶持人なれバ
此日くのを定めて安土へ聞えいらんう今日まで何も
仰らるをとの無ぞふゝぎと互ふ謂つるふ却くさの
日くの酒宴游興ゞ讒者を避る種技くとや我等式乃
企くくも及び難き処ありと感心して立歸を蜂須賀
堀尾とかゝり合をそいゝも安心かをりけり然るふ
この頃石山本願寺押えのゝめ天王寺乃附城う

在ける松永彈正少弼久秀ふそろふ心かそろ〻
天王寺の附城を引退き居城和州志貴山ゟ楯籠
信長へ敵對乃色をそ顯そ〻ける此由佐久間右衛門尉
信盛筒井順慶の許より注進〻討手延引ゟ及ひ
由〻敷御大事となるもぬ屋〻とやけれハ信長そ
め〻筑前守ハ能いひ入るもの〻ふ久秀を古兵ゟて
智謀よのつゝふ〻ぐ元より心を許さ〻ぬかゆゑを
昨今敵とな〻んとハ思そぎり〻もれを筑前守ふ
仰合さるゝ由さいとゝのり急を參ゟとやをとて猪子
兵助を御使ゟ立られそり
織田家譜ふ天正五年八月雑賀の殘黨謀叛

をつかハ佐久間右衛門尉を大將〻〻是を討を佐久間
ゟ代ふ〻ふ羽柴筑前守を〻て天王寺を戍らを〻と
ゟ極松永ゟ謀叛まゝ是ふ後る〻時ハ秀吉甚當
ゟの際の〻ゝ知べ〻猪子兵助一元ハ美濃國の人
ゟて藤原氏那〻〻

松永彈正少弼久秀謀叛の事
并織田勢信貴山を責る事

小谷城中ふ〻ハ筑前守毎日〻〻酒宴游興〻てありける
を淺野蜂須賀理を〻〻〻〻て異見をれとも更ゟ聞
入を猶も日ごゝゟ募ゟけるゟゟり竹中半兵衛尉ふ
いれを相談を〻〻処重治おそれふそ筑前守の筑前守

こる処あれと感ぜしかい聊心を安く勢しよ秀吉
ふそろよ浅野を呼そやく出陣乃用意を爲べ松永
彈正謀叛して志貴の城ふ籠るなるん其なるく
天王寺ふ籠り西國を謐んりれあらど翌あきての
中ふ安土より御使あるべそやくと急うをかどれ
重き謹のうちふくハ何をいまぐそれさへ許ぞて
爭でう天王寺の戍ふと仰らるべき是も例の筑前守う
荒凉の振舞やとあるくハ更ふ誠とをぐされ共主乃
下知なれハ目立ぬるどよ用意して心もとくよ勸まぢり
ける処へ重治をを來りいらり浅野殿安土より御使の
あるべきに拙乃用意しるへやと勸めしかバ浅野

よりを不審ふありひあるく左い筑前守も如斯う
ヤをとる御勘當乃身形り左様のとあるべしとも
ありそれぞ貴所よりを定のよ聞出しるふとのあり
てやと押かへをハ半兵衛尉浅野どの御邊を誠ふ
知くおそをしよ形御勘當のそめより安土う
召置ををふ猿樂人どもか大开い乃小谷へ入込く
いりし形り心得ぬとくありひしよやかく筑前殿の
めるふ由承そうて重治う心とあるくんや
推量しまづ安心してありるが此一日二日例の猿
樂人う小谷よ行かふとの絶るを不思議とありく
密ふれと伺へバ松永彈正う謀叛して志貴の城ふ籠る

より聞えうり然らハ早く出陣の用意あるべしや程形く
安土より上意のあらんふとくくと急しなそこ重治を
とゝゝ住居へ立歸る淺野竹中ふ急きられ然ハその支度
せんと立上ふ処へ安土より御使のよゝ注進しけれバ
淺野大ゝ仰天し取袴して城門の外へ出ばゝ猪子兵助
馬をのりもて城門と入ところ筑前守そゝを出先ゝ立て
廣間ゝ坐を定めゝゝゝる時ゝ兵助やけ様仰付
らるべきとあり早く參上仕れとの上意く只今ゝを
出仕あゝるべ但武井ろ内く告知くふ天王寺戍ふ
つゝそゝるへきとの御事なりその用意しゝ登城
然るべゝとゝいとて兵助ハ拵ろ儘馳かへる秀吉

畏く出仕の支度なゝけるぞ小谷城中そゞ名て
安堵あゝるうけ秀吉安土ふ參上しけれバ直ふ
御前へ召出され松永久秀謀叛して居城志貴ふ楯籠る
然らふ天王寺の城番手薄ふありそゝ別所小寺何れも
天王寺を戍らんとそと所望するといへども譜代の侍大將を
もてゝ新參の與力を受んと本意なゝゝ其方天王寺へ
罷向ふべゝ松永とゝば御出馬ありて退治踵成廻らそ
べゝゝ思召と仰出されゝバ秀吉かゝゝ天王寺へハ
只今より馳向ふく堅固ふ戍そべくふ志貴ふ御出馬
勿体なくふ城介殿御向ひ行ゝゝば筒井順慶以下の國人を
先鋒とゝゝゝふべく時宜ゝよゝゝゝ秀吉もそ也向ひ

願くハ本願寺の法師原何条事を仕出しやすべき
更ゝ御思慮を煩ハ及ばざらんと言上せかば
信長我り此顔ふそらすかゝる尋常の者なるハ
此際籠居してたゞくの出仕形りすべくうちぞふ
詞をも扣えめよそやべかめれそれゝ御許ありて
召るゝやいなる早いかなれ如く意ゝ信て裁判ゝとめ
氣儘さるゝとふ身をハ有るべく上の御爲ゝとれゝ
心みゝらく掛ざるんめゝ及ぶべきことかい然ハ筑前守ら
やゝゝに御下知あるべゝして早速岐阜へ御使を立られ
城介殿ゝ松永討手の大將を仰付られ濃州畿内の
勢を催促あるゝひけるゝ秀吉ゝ言上しゝるを

筒井順慶ハ法師あるら累代の名家みて旗下ゝ
智謀の者多くゝ行り掛るの上此日頃松永か志貴ゝ
ありて逆威を振ふゝと何も惡しゝ思ふ者どもなれば
彼ゝ先鋒を仰付られ然るべゝさらハ筒井と始一族
家人拾別ゝ骨折やべきにくゝひと謀アそけるゝ因ゝ
其意を城介信忠ゝ申含めゝひ其のち西國
發向を追ゝゝ思召立るべゝそれゝ付ゝ山陰道ゝ
西海道の事ハ惟住五郎左衛門尉へ仰付られ山陽道ハ
羽柴筑前守と兼ゝ思召定られゝ処あるゝ幸天王寺
城番ゝ罷越あれば序ゝ播州を賜るべき間彼處ゝ
手遣油断形くゝ付大和落去の上ハ勝手次第に播州へ

下向然るべくとぞ仰られけるとぞ秀吉直に天王寺へ赴きみり斯て城介信忠松永討手乃大將ぞしける
進發なりゝ從ふ侍ハ惟任日向守佐久間右衛門尉長岡兵部大輔筒井順慶法印を始總軍二萬三千餘人和州へ出て發向し十月朔日和州片岡の陣ふ押寄責立る是ハ松永ゞ旗下海老名右兵衛友清森兵介正友等ゝ搦籠る処なり寄手乃總軍一同ふ責かゝる中ふも長岡の嫡子與一郎忠興同頓五郎初陣しく兩人とも抜群の働し一番首を得く高名をり惟任日向守も能軍しく首あまゝ打捕たり城方ふても隨分よく防戰なゝかゝ寄手大勢なれバ入替く

戰ふわゞとふ城兵あまゝ討死を城介殿實撫ありて事始ふと悦び給ひ同月五日志貴の城へ押寄給ふ先陣ハ筒井順慶法印大和國の案内者なりかゝハ此年來松永惡しと思ひいまハ士卒まゝも大ゝ悦び真先ふ進んく攻寄たり惟任細川佐久間の三人筒井ふ續く嚴敷攻付鐵炮を打かけ鬨作りく夜晝二日の間息をも継ぎ責立る山ハ嶮岨ふ谿ふゝく要害堅固なるゝふ大將も老功の松永なり從兵ハ千餘人必死ゝなりて立籠を手配ゝとゝれハ防ぐゝも強く寄手打死多くしる勿く容易く落べくも見ゝ然共長く籠城きば

終ふ兵粮矢玉限アるなり早く大坂本願寺へ加勢を請求め中國の毛利へ兵粮を賴遣さるべくおの〳〵ども如是く四方を寄手取巻かるゝ由を誰人道れ出ぐゝ此ら少く評定しけるふ森傳介好久とうかも元ハ筒井の郎等なりゝふが反間のゝめふ松永が許ふ仕へ居たりしが進く出く此御使某勤めべしと望ゝけるふより松永大ふ悅び即傳介ふ本願寺の書簡を渡しけるふそうゝあてけれ傳介ひそうゝ圍を脫出筒井ゝ陣所へ趣き本願寺へ加勢を請求めんなら城を出し由を告けるふより順慶良策を得ゝと悅んぐ筒井の手乃者二百餘人を撰び合圖のゝかりとき定め本願寺より加勢と稱し十月九日の夜山越乃閑道よりひそゝふ傳介と共ふ城中へ入ふをゝうけるを松永夢ふも知らぐまとふ本願寺の加勢ぞと思ひけれハ樣〻ふ〻てなし役所〻〻と教けるこ特ゝゝ彼手の者寄手の方ふ追手搦手牒合を都合其勢一万三千餘騎筒井を先陣として責上り来ふ城近くなるしふゝ鐵炮を打掛けれバ城中ふても同じく鐵炮を打掛ぐ防ぎける折も城の奥の役所より失火して上を下へと打かへ〻ひめくを見て彼筒井ゝ手の二百餘人ふゝかゝるふ走散て火をもちその上城戸を開く寄手を引入けるふそ城兵ふとふ

驚きはてて扨ハ寄手あたぞらへれしゝ又ハ謀反裏切の者出来しゝ何ゝも此城かゝてハ持さらゝ難しゝと うろたへさゝめき静まらねバ松永も今ハ是までゝ心静ふ自害をんと本丸の天守ふとそハのぼりそれ

重修真書太閤記五編巻之八終

重修真書太閤記五編巻之九

信貴山落城松永父子滅亡乃事
并羽柴筑前守播州下向の事

筒井順慶法印の手乃者志貴山へ紛ゝ入本願寺より〻〻加勢と稱しけるより流石老功ゝ松永弾正少弼久秀ハ是を疑ゝ城中の案内を知を馳走ありけること運の極めと云形から憂かるゝ所と共なり去程〻城中役所〻〻火掛を焼上りけるゝ松永今ハ是まゝ形りとゝく本丸の天守ふ上ゝ嫡子右衛門佐久通を近ゞけ我信長を怨る

との深きことを其方もよく知りぬと思ひ給へば今新に
云ふ及ばず爰に籠城して軍を興さば信長かゝる
自ら向ふらんも然らば信長に一矢射てとゝのひ
彼をやくも悟りもく陣頭に寄来らば猶いまゝ乳
臭き信忠をさて向うり侍の中にも柴田丹羽などハ
見えず是必信長の謀主木下藤吉郎めら計る処多し
彼者今ハ羽柴筑前と云とかや其方如何に思て戦場を
遁れ信長ハ父が怨を晴さべし乱軍の中ハ同じく
死しなり共誰か其實を知人のあるべき早く〳〵
急ぎをけまつ久通竊に服色をかへ何處ともなく
落行けり久秀今ぞ心安し去ぞ腹を切べきことと

云ふ〳〵見返ぬ押板に平蜘蛛と名付るまし
名物の壺あり是ハ呂宋乃古渡にて東山殿の
愛翫あり品を如何にてか久秀これを
持傳へし形り日頃殊に執し思ひけるを信長聞
食し一見をぞやと仰られけるに久秀あるそ
嘆らもぞ所望度くに及ひしかば為方形くあるぬ
壺を平蜘蛛形りとく奉るされども是も同じ東山殿
御物の内なれば有るこの物ふ〳〵くて類べくも
なかりしかとも信長ハ氏ふ〳〵く愛らしがる日数ふれども
返されぞ一日荒木攝津守を召く其方を大黒菴の
弟子とそく薄茶一服と所望をられうべ村重

そなたの数奇屋に入るべきれば松永の壺あり如何にして
愛ふハいかるやらんとありひ居さうけるに信長入らるひ
平蜘蛛をハ見知いるやと宣ひけるまゝ村重いろも
見覺えなくいとやすきものを信長呵々と笑ひ給ひ
其壺ハ我平蜘蛛なれと仰られしのハ村重ハ思ひも不思議
これハ松永ら所持仕る土蜘蛛とやう壺にて平蜘蛛ハ
かゝるものそなれとなにのもの様ざまに委しく語り
出れハ信長大ふ氣色を損じ古狸めに欺かるゝ
惡き久秀ら振舞ニのゝと怒られしとハ聞しかども
そのゝち何とも仰られざりし

村重天文十六年丁未ふ生る大黒菴紹鷗居士乃
物故せし弘治元年ハ村重九歳の時ふく利休居士ハ
世四歳ぞり
久秀滅びくし後信長の手ふ渡さんも腹たし如何にせ
もせもしと躊躇しかも忽ら思ひ返し天下の名物ら
私に失ふ惜きものとて其際まで付添居さふ
仙可といえる茶童ふ此壺いらふもして世に傳ふ
願ふハ汝この所を切ぬけく片山蔭ら世を易く
壺の齡を長くせんとて取をしよりを仙可泣々
請取しく天守を下んとなるけるが主の名殘乃惜を
ハんで顧がちなる形時久秀腹を十文字に掻破を
ける血のゝどゞしくけるふ驚き立歸るとて壺を

取落きゝが此壺故ゑ立退とゝなる主の仰ありと思ひ直し又立ちのぐふ時何者ゑ火を放ちけん天守の五重めゝり燃出しゝゑゝり仙可まるゝく仰天し終ゑ戰場を遁れ出産在所乃攝州五百住の里ゑかくれ住しとゝゑ久秀仙可を落しての ちそもく軍のかくざゝり拙きと我ゑのぐら誤を森傳介をゞめゝりかゝゑ隙を伺ゑを我ゑ能仕しゝゝ思ひらざりし愚さゝよ然とて我筋目あきめ此形れべ譜代相傳の郎從なし因く恩ゝ人ゝり倍しゝくなゝくゝゝれを傳介が一生安く過さを奪きうと訇をく死しなをしと聞ゑく真ゑ傳介算ゑ立返を大福者とゝなりけるがあくる天正六年十月吉

の夜頓ゑ血を吐く死してゝゝり久秀自殺をしとのくへ家人等我めくと討死自害しさゝもゑ名高き志貴山の城忽ちを落く織田家の軍勢亂入し今捕高名とゝぐくなゝり久秀今年六十八歳城中上下戰死の者三千餘人と我く聞ゑゝ寄手乃方ゑを手負討死四千餘人ゑ及ぶ志貴山落去をしのバ城介信忠朝臣諸勢を率し同十二日京都ゑて凱陣二条城へ入御合戰の次第を記し安土へ言上あゝりゝくハ信長大ゑ喜ゑを給ひ堀久太郎秀政松井友閑を御使として京都奏聞なゝるゝゑ老功の松永を弱冠の信忠神速ゑ征伐をと奇代の勲勞なり因く勸賞行るべしとく信忠

從三位ゟ進ミ左近衛中將ゟ轉任あり又順慶法印ハ
大和國全く所務をべき由仰られ一ノ順慶法印を
そ〻ち旗下ゟ諸大將いづれも集會して怨敵れ
松永を滅しそるさく年來の本意を晴け一悅ひ
あ[illegible]り松永乃闕所ゟとく〻筒井家領とあしらひ
其の一族旗下隨ゟ加增して萬歲の聲里おとゟ
滿ア

筒井陽舜坊法印順慶ハ天文十八年三月三日ゟ生
る今年ハ廿九歲父ハ榮舜坊法印順昭母ハ大和國
山田城主民部少輔順貞入道道安の妹なり順昭
天文廿年六月廿八歲にて早世順慶三歲にて家督

羽柴筑前守秀吉ハ此ゟど本願寺押へのため天王寺ゟ
附城ゟ向て時〻斥候を出し門徒等と刦し或時ハ矢風を
負を或時ハ鐵炮烟ゟひもぞをあどつ見合を居ける
うちゟ松永滅亡して和州平均し諸將凱陣をしと聞
秀吉も天王寺の定番を交代して安土ゟ參向し勝軍の
祝詞を述しハ信長も滿足ゟ思ひ只今ハ急なる敵も
筑前守ゟハ早く播州ゟ下向し國中を切靜ひべしと
仰出されしゟり筑前守畏て出陣の用意し十月廿三日
播州へ下向をけれハ姫路の住人小寺藤兵衛尉政職同官兵衛尉
孝高等織田の大將下向あるゝと待居けるゟ羽柴筑前守
播州の總大將とゟ下着をると聞藤兵衛如何なる

所存なり筑前守下著の前日姫路の城を出て備後の國ふ
至り鞆の津に蟄居し姫路ふい官兵衛尉孝高を置けるに
孝高阿彌陀の宿まで迎に出先に立て案内し姫路に
至りまゐ二の丸ふ筑前守を招請し置その間ふ本丸の
掃除整をし小廣間ふ孝高注文を以て役所〳〵廣間
小廣間天守まぐまぐ羽柴ゝ家人ゝ引渡し
疎意なくゝゝ〳〵けふふまで筑前守も孝高の
信義厚きを感じ國中平均の手段を相談し
互に心置形く方便を語ひ合ふに手遣なし
國中乃領主地頭從ふるの者人質を取固め從そ
ざるの者を人數をそし〳〵向是を攻まるに佐用の

城主福原隼人ハ備前國岡山乃宇喜多和泉守の
旗下なりけるか織田家乃催促ゝ從そ是ゝ
於く秀吉五千餘人を引率し佐用の城に押寄な
先陣ハ小寺官兵衛尉孝高なり東の山ふ陣を取
城中と相向ふく戰を挑む福島片桐加藤堀尾
蜂須賀をそし一騎當千の勇士等小寺ふ續て
城に向ひをめき叫んく攻かまハ羽柴筑前守總軍を
下知して鐵炮を打を貝鐘をならし鬨を揚せまあぐ
揉こうけれハ福原隼人遂に叶そゞ城を開く落行
けるを小寺官兵衛尉案内者なるかハ追掛てあれを
打留ふ拔の隙ふ加藤福島城をとゞ乘取けりこれハ

西國に向ふてせめての城責なり上方勢ハ手ぬるといそれるゞ始終軍乃名折ありとて羽柴筑前守いよ
なる強氣と出し短兵急にせめ〳〵佐用の城播州
と備前の境にて要害よろしき城なるを只一日に
攻落し〳〵かハ筑前守乃軍ぶりあなどりがたきこと
火の野を燎に似たりまゝハ塘を決し水の如し必
恐怖ふてかゝりのひけるゝどに打連〳〵陣頭に
馳加るに引も切ずその者どもを引具し〳〵
上月城に押寄くゝよ裕と責けるに城主半日
ぞうつまゝらへけるが終に叶ずして落城をそれより
福岡野へ押寄取圍むその勢破竹の如し小寺

孝高ハけうハ佐用上月より以來あまりに御軍の
次第をげしく御勢息をも継あぐ定めて困窮し
ひたんらちと緩くと御責あるゞをやと諫めに筑前守
いそく始く向ふ敵ありその上に此邊ハかゝ宇喜多ぶ
軍機ぶりおのひしゝゝなる者とも彼り因く東國并に
上方の軍備を耳よハ定めそ聞しなん目にハ只今
見るゝに然者能と是まで秀吉ら胸中に秘し
なる所を露しく中國武士乃肝をとゞひしきもの
一度ハ如斯手荒ある軍しくらん又方便を替
ゞき彼りられ不知國に入く合戰をする大將の機密と
且如斯烈しく持ふを時ハかの直家をつと打出し

我直家を降し是より奥の毛利を打滅さん時は
先鋒となさんとおのゝ〳〵ハ彼り此福岡ハ直家由緒ある
処とさるゝ定めて近く後詰乃ためふ馳来るなん
此方ふも其用意しく待つゝき彼りと語ひるふぞ
孝高も舌を振ふて偖ハ此人中國を斬崩し毛利家を
斃し西國までも打取んとあるふ〳〵鳴呼おそろ
天下乃武將とハ此人なるべしと心よふくあのひ〳〵
とかや織田勢佐用上月を攻あぐ　非日今日福岡を
せむるよし岡山へ聞えしかバ和泉守直家大ふ驚き
上方乃温弱どもの軍備何程の事ゝなくんと思ひ
ゆるしく佐用上月の者共ゝ城を落されしとの口惜き

然バ敵を福岡まてを入し彼り云甲斐ゝなく
軍ハいつも斯有めれ彼らを去とて信長の自身向ひ
しるゝなつゝ其郎等乃羽柴筑前ゝ大將しく下向
ゆしとや其如ハ昔より小猿とやらん云ゝ氏も
種姓もなしのなゝぬのれと聞某とハあそぬ敵なり
其方達そや駈向ふく追散し我等ゝ家の太刀風
を加をく身震さをよと下知つゝ長船紀伊守岡越後守
を大將ゝて三千餘騎をさづけ福岡の後詰ふ差向
けを秀吉そるかゝなこれを見く寄るハ宇喜多の勢
なれど旗乃紋備の立様直家とハあのそれぞ誰ふゝ
ゝんたしのゝ見よと佐用上月ふて降参を者を

出したくけるか馳かけりく如何とも宣ふことく和泉守
よてハいをは是ハ宇喜多ゟ家老ふく長船紀伊守
岡越後守よくいなり勢ハたつゝよ三千の内外と見く
いとやけれバ筑前守さもたるべ但今日ハ和泉守と
對面きんと樂くけるのれを残念や然ハ此者ども我
追散ー和泉守ゟ城まて押攻よやと勇め立られ
いいも先陣ハ某承るべき筈なりとく小寺孝高
五百餘騎ありてもふゝび切くかく敎長船岡ハ和泉守ゟ
家老ふく肱股と頼む勇士ゟり小寺ゟ五百餘騎ゟて
真先よそゝむを見く彼を姫路の小寺ゟりふくさも
ふくー只一揉よ揉潰ー軍神を祭れやと競ひかる

筑前守これをくゝ小寺ゟゝなる者共かられと下知をれハ
堀尾茂助吉晴無二無三ふ馳出ー長船ゟ手へ突かゝを
能敵五六人切伏大勢の中よ取圍られ大童ふなりて
戰ふありさもゝ昔源平の軍ふ高名を梶原源太
景季も是ふハ過ーとおびさし加藤福島片桐脇坂
堀尾よ續いく突立られハ長船岡の三千餘騎散ふ
駐散されて備ふゝふなりけれハ孝高得ゟと五百餘騎
真丸ふなりて揉立ー程よ宇喜多勢終ふかゝを駐破
られ右往左往ふ敗軍を紀伊守と越後守とゝゝを
拙き者乃振舞やあをゝるれ者よかけ破られ見苦敷
逃るといふゝやゝる返をやかくを備を立直ーて今

一軍せよと下知それとを耳、あるさらふ聞入を岡山さして
迎うけを筑前守物始よと悦く直ふ福岡乃城を
責落し首數二百ばかり斬取く軍を姫路へ返しければ
孝高そ乃乗取めひし上月ふ勢を残して守らを
めへと勧めかとも筑前守たゝ打笑ふくいるゝく其
まゝにな置ゆく和泉守う勢を籠兵粮玉薬を入
なん後へ又打破り今捕をんのれをと謂けるふそ孝高
いよゝ深く秀吉を頼母鋪めのふ思ひしと彼り案乃
如く直家ふゝび上月の城ふ真壁彦九郎治次ふ
五百餘騎をそく兵粮玉薬多く籠堅固ふ守るへ
此度ハ某自向めゝと約束して拔く置けを

山中鹿助幸盛備前勢を破事

并上月十郎上月籠城の事

真壁彦九郎五百餘騎ふて上月城ふ楯籠ると聞
羽柴筑前守然バ押寄追落し兵粮玉薬を奪取べと
評定あるける処へ雲州尼子の浪人山中鹿助幸盛此頃ゟ
筑前守う手ふ附て居たりけるが進ゝ出て今度上月の城攻をハ
某一手ふ許させるへ見事ふ責落し兵粮玉薬相違彼く
奪取て奉るへと請やうハ秀吉子細ふ及許る幸盛
悦び日頃一味同心の約束を元田豊前守岸左馬進池田市助
立原源太兵衛尉森脇豊後守熊谷新右衛門尉入野十兵衛尉岡野
左兵衛尉秋上甚介寺本半四郎尼子助四郎亀井新十郎石橋

久三郎池田甚三郎をもとめ八百餘人上月の城よおー寄けり
上月ふくハ鬼神の如く世よ聞えゝる山中鹿助幸盛以下尼子浪人
一手ゝて馳向ふと聞く真壁彦九郎治次臆病神ゝやさそゝ
一矢射る迄も弱く城を棄さく逃たりしかバ幸盛主從力をそ
入そ一城を追落し直ゝ籠城ー姫路へかくと注進を
備前ゝくハ和泉守直家真壁ゝ振舞言語道断なり然ハ
直家駈向ふく山中を攻殺さんと憤ゝけ共ハ真壁ゝ弟同
次郎四郎治時兄ゝ耻辱を雪めんと思ひけるゝや上月をバ
真壁一手ゝて取返ーゝ遁と思ひ切く請求めけるゝよ
直家もその志を感ーともかくもと我許けゝ真壁治時大ゝ悦び
一族郎從を催促ー直家ゝ加勢と共ふ一千五百餘騎上月表へ

押寄て尼子勢を只一攻ふ攻落ー真壁勢の勇氣を示せ
よやと上月の城より六十餘町乃外ゝ陣を取鹿助かくと聞
彼者ハ兄ゝ辱をそゝがんと怒氣を含て寄來れいその勢
定めく當り難かるへ然ハ味方も多く損ずべ今夜
一夜討ーて彼等ゝ肝を潰さもく呉んするものと評定
抽の夜子丑の刻より出立て八百餘騎真壁ゝ陣へおよを
風上より火を掛く揉立ーかハ備前勢不意を討みく
狼狽ー討るゝ人數知ぞ大將真壁二郎四郎治時亂事の
うちゝ討死ーけれいその手乃兵立足もなく敗走ーくるゝより
山中立原勝関を舉く引返を
山中鹿助幸盛天文八年己亥の生今年世九小瀬甫菴乃

太閤記ハ天文十四年乙巳八月十五日の生と云ハ誤なるべし
始ハ池田甚次郎といふ十歳より弓をよく十三歳まく
手柄ある太刀打十六歳の春三日月ふ今より三十日の内ま
譽を取をるべしと立願をゝ伯州小高の城攻ふ菊池
音八といふ大剛の者を打取かばそれより半月を胄
の前なそうのとなりゝ又毛利元就六万餘騎まて雲州へ
寄來りし時尼子義久四万餘騎まて大塲谷へ打出
合戰を挑ふけるふ甚次郎只一人まて十七人を打取て高名
をり然るゝ山中某の家を継ゝ山中鹿助と改めゝ

重修眞書太閤記五編巻之九終